

八戸三社大祭に見る災禍の影響

：コロナ禍を事例に

The Impact of Disaster on the Hachinohe Sansha Festival:
A Case Study of COVID-19

氏名 館合 利伽子
英文氏名 TATEAI Rikako

1. 序論

(1) 研究の背景

無形文化遺産は様々な災禍を経て現在に至る。新型コロナウイルス感染症の拡大により全国山・鉾・屋台行事は2020年、2021年は中止、2022年は12件が通常通り21件は一部変更して開催され、継承の懸念が指摘された¹。

2016年にユネスコ無形文化遺産「山・鉾・屋台行事」の一つとして登録された八戸三社大祭は青森県八戸市で開催される祭礼行事である。享和年間のオガミ神社の神輿を新羅神社へと渡御する祭を起源とし、明治20年頃に神明宮と新羅神社を加え3つの神社の合同例祭になったとされる²。現在は各神社の神社行列に加えて、オガミ神社11組、神明宮7組、新羅神社9組の山車組が巡行する(図1)。

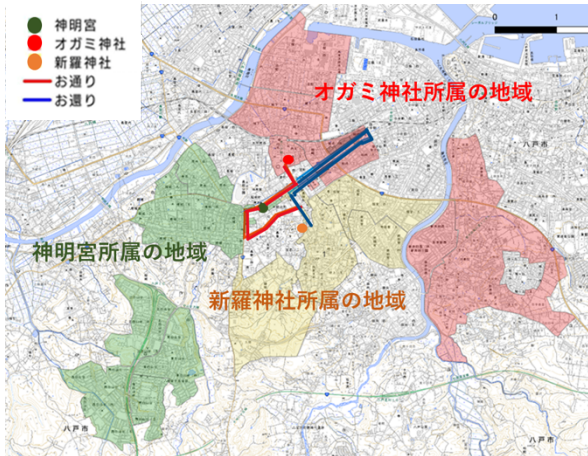


図1 神社と山車組参加の地域

(2) 既往研究

既往研究としてコロナ禍の特異性に関する研究³や東日本大震災における中止と再開に関する研究等がある。八戸三社大祭については山車と都市の変化、山車組とコミュニティの拡大に関する研究⁴がある。しかし、コロナ禍前後の参加者の状況および神社による変化の違いについては明らかになっていない。

(3) 研究の目的と方法

本研究は八戸三社大祭を対象として、歴史的な災禍における祭の形式と山車数の変化をふまえ、コロナ禍前後の人数、資金、活動拠点等の変化を明らか

にし、三社の比較を通して継承の課題を考察することを目的とする。

研究方法は災禍に関連する歴史は新聞を中心とした文献調査を行なった。コロナ禍前後の状況を把握するために山車組を対象にアンケート調査を実施した。さらに、山車小屋の現状の確認および祭開催の現状を把握するため現地調査を行った。

2. 八戸三社大祭と災禍の歴史

八戸三社大祭は災禍による中止や変更を繰り返してきたことが明らかになった。神事と山車展示のみを行う形式は明治期から見られ、戦前は災禍の際に神事と山車展示で対応する形式が一般的だったと考えられる。山車の数の変化は図2のとおりである。飢饉や大火、戦争を含め16回の中止があった。終戦後の再開以降増加し平成13(2001)年に27台となった以降変化がなかった。

コロナ禍の対応として、2020年には旧式の小型山車の制作と展示、お囃子披露が行われ、2021年は加えてライブ配信など新たな取り組みも行われた。2022年は「代替行事」として山車組合同で山車を1台制作し簡易運行した。祭りに関するイベントが増加し形式が多様化したことが明らかになった。

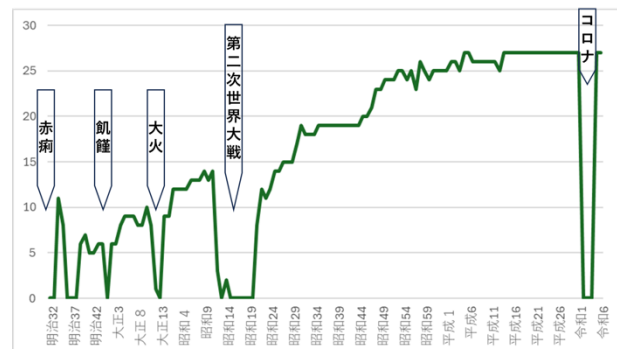


図2 参加山車組数の推移⁵

3. コロナ禍前後の山車組の変化

(1) アンケート調査の概要

アンケートは山車組代表者に配布し、27組中23組から回答があった(回答率 85.2%)。内容は「コロナ禍前後(2019年と2023年)の参加者の総数と年齢」「お囃子/運営/制作の人数」「コロナ禍(2020-2022)の活動」「運営のメンバー構成の変化」「収入の変化」「山車小屋の状況と変化」等である。

（２）参加者と年齢

全体の参加者は367人減少した。お囃子は、大太鼓は成人以上、笛は中学生以上、小太鼓は小学生が中心に担当する。お囃子の人数の増減を三社ごとに見ていくとオガミ神社の山車組はいずれも増加した。新羅神社の山車組はいずれも減少し、神明宮は大太鼓6人、笛8人減少、小太鼓5人は増加した。

表1 参加山車組数の推移

	小学生以下	中学生	高校生	大学生以上64歳まで	65歳以上	合計
神明宮	8	-18	-20	36	4	10
オガミ神社	95	-22	-4	-54	5	20
新羅神社	-24	-45	-22	-10	-1	-102
合計	79	-85	-46	-28	8	-72

（３）コロナ禍期間の活動

オガミ神社は回答のあった山車組はすべて年1回以上の集まる機会があり、子どもが集まる機会は年1回が4組だった。新羅神社と神明宮は子どもが集まる機会については全くないが5件だった。

表2 コロナ禍期間の活動

		全くない	年1回	年3回	毎月	その他
神明宮	運営メンバー	3	2	2	0	0
	子ども	5	2	0	0	0
オガミ神社	運営メンバー	0	3	2	1	2
	子ども	3	4	1	0	0
新羅神社	運営メンバー	1	2	2	0	2
	子ども	5	1	0	0	1

（４）収入の変化

神明宮の山車組は門付・参加費・その他の収入が減少し、オガミ神社は交付金・門付・参加費の変化がなかった。新羅神社は交付金と門付の変化は無く、参加費やその他が減少している。

（５）山車組

山車小屋は仮設・常設の差異に加え、部材もシート、トタン、シートとトタンの複合、恒久建物と違いがある。神社ごとにみると、オガミ神社は恒久建物5件、仮設0件である。新羅神社は恒久建物3件、仮設0件であり、場所の期限があるまたは随時更新が必要な山車小屋が9件中8件であることが特徴である。神明宮は恒久建物の山車小屋0件、仮設2件であることが明らかになった。

4. 結論

八戸三社大祭は中止や変更の前例がある災禍の期

間、山車行列は中止されたが、災禍後山車組の数は回復した。コロナ禍の中止期間はイベントが増加・多様化し様々な方法で継承が図られた。

祭りの参加人数は減少しているだけではなく、三社の比較では、オガミ神社は他の神社に比べて山車小屋の恒久建物の割合、コロナ禍中に活動が多く、お囃子の人数は増加した。新羅神社と神明宮はコロナ禍中の活動がない山車組が半数を超え、参加費は減少した。山車小屋の土地の使用が安定しない新羅神社は、お囃子の人数の減少が最も多い。

このことから、神社の山車組によって継承の課題が人材の不足、収入の減少、不安定な活動拠点と異なることが明らかになった。

コロナ禍の山車行列の中止はあくまでも長い歴史の中の一時的変化に過ぎないが、行事の規模拡大とともに、影響を引き起こす要素も拡大し、変化も多様化している。これによって山車組の継承の安定に差異が生まれる懸念がある。持続的な継承のためには子どもや若い世代の参加者の確保は必須でありそのためには祭り以外で祭りに触れる機会が役割を持つ。また、非常時にも耐えうる継続的な活動のために、安定した活動拠点の確保と神社ごとないしは山車組全体を包括して協力・支援する体制が築かれる必要があると考える。

参考文献

- 1 全国山・鉦・屋台保存連合会 (2022)「令和4年『山・鉦・屋台行事』の実施状況について【第2回調査結果】」(八戸市学芸員 柏井容子氏提供)
- 2 八戸市教育委員会 (2002)「八戸三社大祭文化財調査報告書」
- 3 三隅貴史 (2021)「ポストコロナ社会における祭礼維持の課題」(鳥越皓之・足立重和・谷村要編「コロナ時代の仕事・家族・コミュニティ：兵庫県民の声から見るウィズ／ポストコロナ社会の展望」ミネルヴァ書房)
- 4 小野清隆 月舘敏栄 (2010) 八戸市の街並みの変化が三社大祭に与えた影響に関する研究
- 5 八戸市教育委員会 (2002)「八戸三社大祭文化財調査報告書」・工藤竹久(2016)「概説 八戸三社大祭」より制作

Abstract: The purpose of this study is to clarify the changes in the Hachinohe Sansha Festival during the disaster, the situation before and after the new coronavirus infection, and to examine the issues of succession. The Hachinohe Sansha Festival had to cancel its float procession for three years due to the coronavirus disaster. Compared to previous disasters, festival-related events have increased and diversified. Regarding the situation in 2019 and 2023, Ogami Shrine has seen little change in terms of income, many float groups own permanent buildings, and the number of participants in musical performances has increased. These may be related to the increase in musical participation and stability of succession.